

深い学びを生み出す生活科学学習指導

永野 優希 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Creation of the Living Environment Studies class to produce deeper understanding

NAGANO Yuuki

キーワード：生活科、深い学び、学習指導、見方・考え方、気付き

1. はじめに

生活科は、子どもの思いや願いを基に活動が展開していくことを大切にしている、いわゆる「ボトムアップ」の教科である。子どもたちが対象との出会いを通して、「見たい！知りたいたい！やってみたい！」と思いや願いをもち、そして、その思いや願いの実現に向けて対象に自ら働きかけていく姿を生み出すことが生活科の授業づくりでは重視すべきことである。また、平成20年に告示された学習指導要領において生活科では、生活科の誕生以来大切にされてきた「気付き」や「知的な気付き」の獲得に加え、「気付きの質を高める」ことを重視することが明確に示された。そこで、こういったことを踏まえ、子どもが対象に主体的にかかわる中で、気付きの質を高めることができる生活科学学習指導のあり方について研究に取り組み、実践を重ねてきた。

平成29年3月に新しい学習指導要領が告示され、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることを鍵として、「深い学び」の実現を目指した授業改善を行うことが求められた。このことを踏まえ、これまでの研究で明らかにしてきた「気付きの質を高める」ことと「深い学び」との関係を明らかにした生活科の授業改善を図ることが必要であると考えた。そこで、生活科における深い学びの実現のための授業づくりや教師の働きかけはどうあるべきか実践を通して明らかにしていくこととする。

2. 生活科の特質に応じた深い学び

2.1. 生活科の特質に応じた見方・考え方とは

具体的な活動や体験を通して学ぶことは、生活科の特質の一つである。これは、幼児期における学びと小学校の学びをつなぐ役割を担った生活科ならではの特質である。幼児期の子どもは、遊びを通して体験的に学ぶ。そして、小学校では、教科等の特質に応じて系統的に学ぶ。この体験的な学びから系統的な学びへつなぐために、生活科では具体的な活動や体験を通じた学びが重視されているのである。

しかし、「活動あって学びなし」と言われるように、単に活動や体験を行うだけでは、子どもの学びは成立しない。具体的な活動や体験を通して、確かな学びを成立させるためには、自分の思いや願いを実現するために、諸感覚を豊かに働かせ試行錯誤しながら対象に働きかけたり、自分の体験を振り返り伝え合ったりしていくことが重要である。

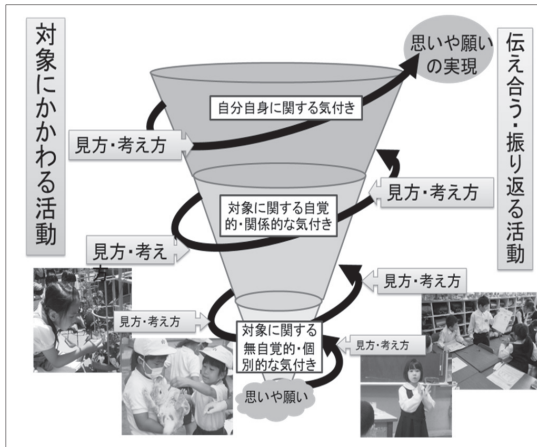
このような学びを通して、「身近な人々、社会及び自然を自分とのかかわりで捉え、比較、分類、関連付け、試行、予測、工夫することなどを通して、自分自身や自分の生活について考えること」（中央教育審議会 生活・総合的な学習の時間ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（生活）2016）」という生活科の特質に応じた見方・考え方が育まれていく。そして、この見方・考え方を、思いや願いの実現に向かう過程の中で、自発的・能動的に働かせていくことによって、生活科の特質に応じた深い学びを実現していくものとする。

2.2. 生活科の特質に応じた深い学びとは

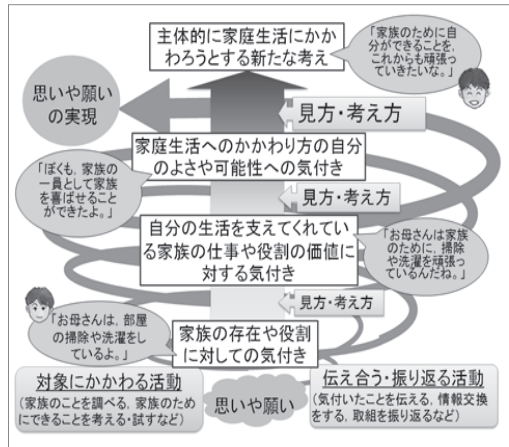
生活科における深い学びとは、自分の思いや願いの実現に向けて、主体的に対象にかかわりながら、気付きの質を高め、よき生活者としての新たな考えを見いだしていく学びである。

子どもが具体的な活動や体験を通して獲得する気付きは、図1のように質的に高まっていくと考える（図1）。対象と出合った始めのうちは、対象に関する無自覚的・個別的な気付きであることが多い。そこから、思いや願いの実現に向けて、対象にかかわる活動と、自分の体験を伝え合ったり自己を振り返ったりする活動とが繰り返される学びの過程の中で、生活科の特質に応じた見方・考え方を自発的・能動的に働かせながら、『～は、自分にとってこんな存在だな。』というように自分と対象とのつながりを基に、対象に関する自覚的・関係的な気付きへと質を高めていく。さらに、『～のおかげで、自分は・・・することができた。』というように自分と対象とのつながりを実感しながら、自分のよさや可能性といった自分自身に関する気付きを獲得する。気付きの質が高まるとともに、対象への新たな思いや願いが生まれ、その実現に向けて更なる考えや活動が見いだされていく。

たとえば、家族に関する単元は、『家族のことを知りたい。』『家族が喜ぶことをしたい。』という思いや願いを基に、家族について調べたり、家族のために自分にできることを考えたり試したりする活動と、家庭での取組について友だちと情報交換したり気付いたことを伝えたりする活動とを繰り返しながら行う。その中で、思いや願いの実現に向けて、生活科の特質に応じた見方・考え方を自発的・能動的に働かせていくことで、図2のように、『お母さんは、掃除や洗濯をする。』という家族の存在や役割といった個別的な気付きから家族とのつながりを感じる（図2）。そして、『お母さんは、家族のために掃除や洗濯を頑張っている。』と家族とのつながりに気付きながら、自分の生活を支えてくれている家族の仕事や役割の価値といった関係的な気付きへと気付きの質を高める。さらに、家族とのつながりを生かすためにお手伝いをしたり、自分の生活を見直したりしながら、『ぼくにも家族を喜ばせることができた。』と家族とのつながりを実感することを通して、自分のよさや可能性への気付きへと高まり、『これからも家族のために自分にできることを頑張りたい。』という思いや願いを基に、主体的に家庭生活にかかわろうとする新たな考えを見いだすことにつながる。つまり、生活科の深い学びとは、生活科の特質に応じた見方・考え方を自発的・能動的に働かせることで実現されるものであると考える。



【図1 深い学びによる気付きの質の高まり】



【図2 家族単位における深い学びの様相】

3. 深い学びを実現する学習指導のポイント

生活科の特質に応じた見方・考え方を働かせた深い学びを実現するには、子どもの『～したい。』『～になりたい。』という対象への思いや願いを基に、生活科の特質に応じた見方・考え方を自発的・能動的に働かせて気付きの質を高めていくことができる活動や体験を設定していくことが必要である。さらに、その思いや願いを『もっと～したい。』『もっと～になりたい。』と連続・発展させながら次の活動や体験へとつなぎ、新たな考えや活動を見いださせていくことが大切である。その際、子どもに自分と対象とのつながりを段階的に実感させていくことが、自分事として主体的に対象にかかわっていく姿を生み出すと考える。

ここまでを踏まえ、次の2点の学習指導のポイントを設定した。

ポイント（1）思いや願いに応じた対象とのつながりを実感させる活動や体験の設定

ポイント（2）活動や体験をつなぐ思いや願いを連続・発展させる手立て

4. 思いや願いに応じた対象とのつながりを実感させる活動や体験の設定

4.1. 思いや願いに応じた対象とのつながりを実感させる活動や体験の設定の考え方

子どもに対象とのつながりを実感させていくために、まず、「意欲をもつ」過程で『○○は自分にとって～な存在だ。』というように、自分にとっての対象のよさや活動の面白さといった対象とのつながりを体験的に感じることができる活動や体験を設定する。次に、「活動する」過程で、活動や体験を通して生まれた『○○のことを知りたい。』『○○でもっといろいろな活動をしてみたい。』という思いや願いを基に、『○○を～すると楽しい。』『○○があると～ができる。』と、自分と対象とのつながりに気付くことができる新たな活動や体験を展開する。最後に、「振り返る・生かす」過程で、これまでの学びを振り返ることを通して、『○○のおかげで自分にも～ができた。』と自分のよさや可能性に気付かせ、『○○のことを伝えたい。』『○○で、もっと楽しいことをしたい。』と、自分と対象とのつながりを生かす活動や体験を設定する。

【表1 対象とのつながりを実感させる「対象にかかわる活動」の設定】

過程	各過程に設定する「対象にかかわる活動」	具体例
意欲をもつ	○ <u>対象とのつながりを感じる活動や体験</u> 学習単元で働きかける対象を用いた遊び（または、遊びの要素が含まれた活動や体験）	・家族単元の導入での家族ごっこ ・栽培単元の導入での校内の散歩
活動する	○ <u>対象とのつながりに気付く活動や体験</u> 対象を用いた遊びで感じた対象とのつながりを基に、さらに対象を用いて遊んだり、製作したり、対象について調査・探検したりする活動や体験	・おもちゃ単元での素材を生かした製作活動 ・町探検での町の人へのインタビューや取材活動
振り返る・生かす	○ <u>対象とのつながりを生かす活動や体験</u> これまでの活動を通して深めた対象とのつながりを振り返り生活に生かしていく活動や体験	・おもちゃ単元のお祭りイベント ・飼育単元での飼育活動の日常化






この考え方を基に、次の表1のように対象とのつながりを実感させる「対象にかかわる活動」を思いや願いに沿って段階的に設定していくことにした（表1）。

その際、対象にかかわる活動ばかりを重視するのではなく、対象とのつながりを自覚するための振り返る・伝え合う活動を子どもの思いや願いでつないでいくことが大切である。このように、対象にかかわる活動と振り返る・伝え合う活動とを調和的に設定していくことで、自分と対象とのつながりを実感していく。

4.2. 思いや願いに応じた対象とのつながりを実感させる活動や体験の設定の具体例

第1学年「木のみ・木のはであそぼう」において、次の表3のように、対象とのつながりを実感させる活動や体験を設定する（表2）。

【表2 対象とのつながりを実感させる「対象にかかわる活動」の設定の具体例】

過程	各過程に設定する「対象にかかわる活動」	
意欲をもつ	○ <u>対象とのつながりを感じる活動や体験</u> 校内を散歩し、見つけた秋の自然物を使った自由遊びの活動を設定する。秋の自然物のよさや面白さを体全体で感じ、『もっと木の実や木の葉で遊びたい。』と、次の活動につながる思いや願いをもたせる。	 <p>木の実や木の葉で遊ぶと楽しいな。もっと木の実や木の葉で遊びたい</p>
活動する	○ <u>対象とのつながりに気付く活動や体験</u> 活動場所を校内から自然が豊富な校外（大学）へと広げ、そこにある秋の自然物を使って自由に遊ぶ活動を設定する。大学での自由遊びを通して生まれる『秋の自然物でもっと遊んだり、作ったりしたい。』という思いや願いを基に、今後の活動について話し合う活動を設定する。そして、『秋のおまつりをひらこう』というテーマを設定し、秋の自然物を利用した製作活動とそれらを使った遊びの活動へと展開する。	 <p>葉っぱでお面ができたよ。もっと、集めて遊びたいな。</p>  <p>工夫をしたら、どんぐりで楽しいおもちゃが作れたよ。友だちにも遊んでもらいたいな。</p>
振り返る・生かす	○ <u>対象とのつながりを生かす活動や体験</u> 製作活動の中で生まれた『いろいろな友達に遊んでもらいたい。』という思いや願いを基に、他学級の友達を招待し、遊んでもらうイベントを設定する。最後に、単元全体を振り返る中で、『自分が工夫したら、木の実や木の葉で楽しく遊べた。』と、対象とのつながりを実感させることで、『これからも自然と仲良くしていきたい。』『他の自然でも楽しく遊びたい。』と、主体的に身の回りの自然にかかわろうとする新たな考えを見いだしていく。	 <p>木の実や木の葉で楽しく遊べたよ。もっと楽しい遊びを見つけない。</p>  <p>これからも自然と仲良くしていきたいな。</p>

【表3 教師の働きかけを具体化する視点】

視点1	試行錯誤する活動や交流活動を生み出す場づくり
視点2	対象とのつながりから生まれる思いや願いをもたせる導入の工夫
視点3	対象とのつながりを自覚させる振り返りの工夫

5. 活動や体験をつなぐ思いや願いを連続・発展させる手立て

5.1 活動や体験をつなぐ思いや願いを連続・発展させる手立ての基本的な考え方

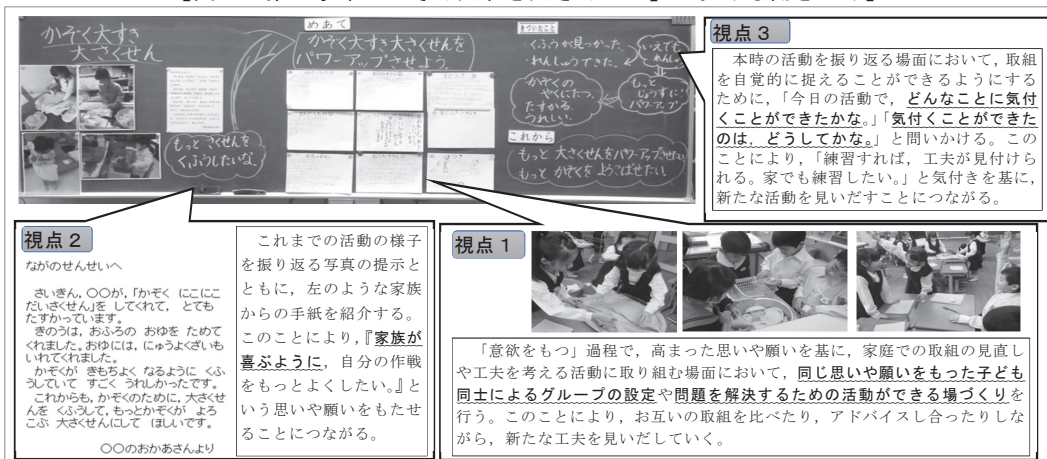
生活科の特質に応じた見方・考え方を自発的・能動的に働かせ、深い学びを実現するためには、設定した活動や体験を、子どもの思いや願いでつなげる手立てを具体化する必要がある。その際の視点を以下の表3のようにまとめた(表3)。

視点1は、生活科の特質に応じた見方・考え方を、自発的・能動的に働かせるための視点である。試行錯誤や伝え合う活動が生まれる場づくりを行うことで、子どもの気付きが、比較されたり関係付けられたりしながら、質的に高まっていく。

視点2・3は、生活科の特質に応じた見方・考え方から対象を捉えさせるための視点である。視点2は、授業の導入で、『自然ともっと仲良くなるために遊びたい。』『町の人と仲良くなるために探検をしたい。』というように、自分と対象とのつながりから生まれる思いや願いをもたせることで、より対象とのつながりを深めようと活動や体験に臨む姿を期待できる。具体的な方法としては、対象とのつながりから生まれる思いや願いを引き出すための問いかけや具体物の提示の工夫などがある。視点3は、終末において、自分と対象とのつながりがどのように変化したかを自覚させていくことにより、対象とのつながりを実感し、新たな活動への思いや願いをもたせることへとつながる。具体的な方法としては、対象とのつながりを自覚させるための問いかけや活動の足跡を可視化するワークシートの工夫などがある。

5.2 活動や体験をつなぐ思いや願いを連続・発展させる手立ての具体例

第1学年「かぞく大すき大きくせん」において、次の図3のように、体験活動をつなぐ思いや願いを連続・発展させるための働きかけを行う(図3)。



【図3 第1学年「かぞく大すき大きくせん」における働きかけ】

6. 学習指導のポイントを踏まえた授業の実践（第1学年「つくってあそんで」内容（6））

6.1. 実践単元について

本単元は、空気や風で楽しく遊んだり、空気や風の力を利用したおもちゃを作ったりする活動を通して、空気や風の力を利用した遊びの面白さや自然の不思議さに気付くことをねらいとしている。

6.2. ポイント（1）の具体化と実際（全12時間）

本単元では、空気や風とのつながりを実感させていくために、次のように単元を構成した。






過程	主な学習活動と実際の子どもの姿	ポイント(1)を基にした活動設定
意欲をもつ (3)	<p>1 くうきやかぜとたのしくあそぼう</p>  <p>風くんが吹くと、袋が急に大きくなったよ！面白いね！</p>  <p>空気くんや風くんと一緒に遊ぶと楽しいね！もっと遊んで仲良くなりたいな！</p>	<p>【対象とのつながりを感じる活動や体験】</p> <p>↓</p> <p>空気や風の存在を体全体で体験的に感じる活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 様々な大きさや形状のポリ袋を使い、空気をつかまえる。 ・ 袋から空気を一気に押し出し、風を感じる。 ・ 袋の上に乗る。 など
活動する (6)	<p>2 くうきやかぜのおもちゃであそぼう</p>  <p>紙コップがロケットみたいに飛んで面白いな！私も作ってみたいな！</p> <p>3 くうきやかぜのおもちゃをつくろう</p>  <p>どうすれば、もっとたくさん空気を出せるかな？ 試しに、穴の数を増やしてみよう！</p>  <p>穴を空け過ぎたら、空気があまり出なくなる</p>  <p>どっちのロケットの方がよく飛ぶかな？一緒に飛ばして比べてみよう！</p>  <p>おもちゃを工夫したら、空気くんや風くんともっと仲良しになったよ！このおもちゃで、友達にも遊んでもらいたいな！</p>	<p>【対象とのつながりに気付く活動や体験】</p> <p>↓</p> <p>空気や風の力を利用しておもちゃ遊びができることに気付く活動</p>  <p>【空気ロケット】 【空気砲】 【傘袋ロケット】</p> <p>↓</p> <p>空気や風の力を利用しておもちゃを作って楽しく遊べることに気付く活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 上記の3点のおもちゃの中から、作りたいおもちゃを選んで作る。 ・ 作ったおもちゃで遊ぶ。 ・ お互いのおもちゃで遊んでよさを見つける。 など
振り返る・生かす (3)	<p>4 みんなのおもちゃであそぼう</p>  <p>空気くんや風くんがいたから、みんなと一緒に楽しく遊べたよ！もっといろいろな自然と仲良くなって遊んでみたいな！</p>	<p>【対象とのつながりを生かす活動や体験】</p> <p>↓</p> <p>空気や風によって楽しく遊べることを他者に伝える活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「くうき・かぜランド」を開いて違う学級の友達と遊ぶ。 ・ 単元を振り返り、楽しかったことや頑張ったこと、できるようになったことをワークシートに書いて伝え合う。

6.3 ポイント(2)の具体化と実際

6.3.1 本時の目標

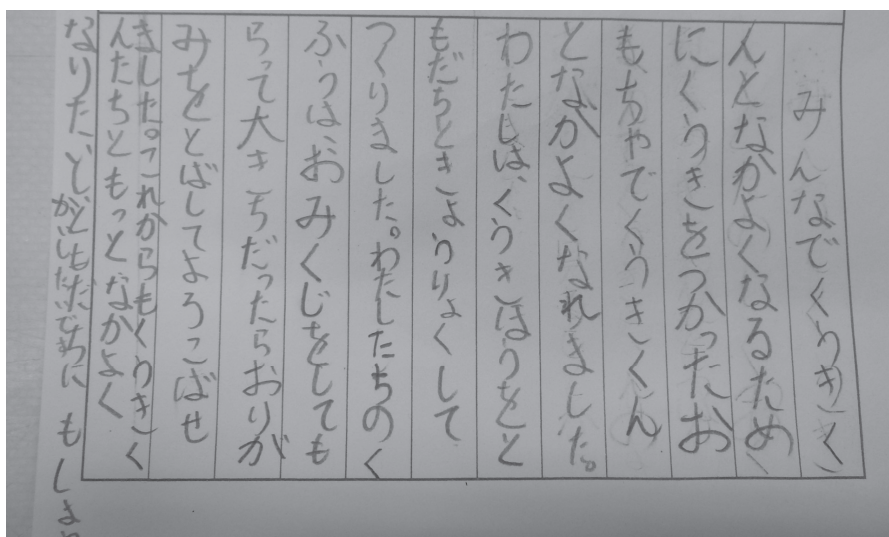
『空気や風を使ったおもちゃで楽しく遊びたいな。』という思いや願いを基に、進んでお互いの作ったおもちゃで遊ぶ中で、おもちゃのよさや工夫を伝え合いながら、自分や友達の取組のよさや頑張りに気づき、これからやってみたい活動について考えることができる。

6.3.2 本時の実際(9/12)

過程	主な学習活動と実際の子どもの姿	ポイント(2)を基にした教師の働きかけ
意欲をもつ	<p>1 これまでの活動を振り返り、本時の学習について話し合う。</p>  <p>もっと遊んで仲良くなりたいな。自分のおもちゃのいいところを友達に知ってほしい。</p> <p>つくった おもちゃの「いいところ」を見つけよう。</p>	<p>対象とのつながりから生まれる思いや願いをもたせる導入の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> これまでのかかわりから生まれた、空気や風に対する思いや願いを引き出す問いかけ 「どんな気持ちでおもちゃを作ってきたのかな。」 空気や風への思いや願いを自覚させる板書 
活動する	<p>2 作ったおもちゃでお互いに遊んだり、よさを伝え合ったりする。</p> <p>【おもちゃで遊ぶ】 【よさを伝える】</p>  <p>繰り返す</p> <p>〇〇君のロケットは、よく飛んで面白いね。</p> <p>おもりや羽根の形が工夫してあるところがいいね。</p>	<p>試行錯誤する活動や交流活動を生み出す場づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 互いのよさを伝え合う交流活動が生まれる場作り(同じおもちゃを作った子ども同士で遊び合う場の設定) よさを可視化して伝え合う交流活動(「いいねカード」でよさを伝え合う活動の設定) 互いのよさに気付かせるために比較を促す問いかけ「同じおもちゃなのに、飛び方が違うのはどうしてかな。」 
振り返る・生かす	<p>3 本時の活動を振り返り、今後の活動について話し合う。</p>  <p>たくさん工夫したから、友達にも楽しんでもらえたんだな。もっと他の友達にも知ってほしいな。</p>	<p>対象とのつながりを自覚させる振り返りの工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の取組のよさを自覚させる振り返り(友達からもらった「いいねカード」の中から、一番嬉しい「いいね」を選び出す活動)

6.4. 実践の考察

子どもの思いや願いに応じて、対象とのつながりを実感させる活動や体験を段階的に設定したことで、『空気や風で遊ぶと楽しい。』『空気や風と遊んで仲良くなりたい。』『空気や風と遊ぶ楽しさを友達にも伝えたい。』と思いや願いを連続・発展させることができた。また、思いや願いを連続・発展させることで、『どうすればもっと空気や風と仲良くなれるかな。』と、思いや願いを実現するための自分なりの問いをもち、主体的に様々な方法で試してみたり、友達同士で比べてみたりしながらおもちゃ作りに取り組むなど自発的・能動的に生活科の特質に応じた見方・考え方を働かせて、空気や風に対する気づきを深めていく姿が見られた。



【写真1 単元終末時の子どものワークシート】

この2つのポイントで学習指導を行ったことで、写真1の終末時のワークシートに見られるように、ここまでの空気や風に対する自分のかかわりから『空気や風と仲良くなることができた。』という思いや願いをもたせることができた(写真1)。そして、『これからは、もっと仲良くなりたいし、友達にも紹介したい。』というような、空気や風とのつながりをさらに深めていきたいという新たな考えを見いだす姿が見られた。

7. 終わりに

思いや願いを連続・発展させながら対象とのつながりを実感できる活動や体験を設定していくことは、主体的に対象にかかわり、自発的・能動的に生活科の特質に応じた見方・考え方を働かせ、深い学びを実現していくことに有効であることを明らかにすることができた。

生活科が低学年のみに設定されている教科である役割の一つとして、幼児教育において育成された資質・能力存分に発揮させるとともに、各教科等で期待される資質・能力へと滑らかに連続・発展させることがある。このことから、今後は、幼児期の終わりまでに育てほしい姿や他教科等や総合的な学習の時間で育む資質・能力との関連性を明らかにしながら、入学当初から2年生終了時までの段階に応じたカリキュラム創造について探っていく必要があると考える。

8. 主な参考文献

- 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」 (日本文教出版 平成20年)
- 吉富芳正・田村学著「新教科誕生の軌跡」 (東洋館出版社 平成26年)
- 教育課程研究会編著「アクティブ・ラーニングを考える」 (東洋館出版社 平成28年)
- 鹿兒島大学教育学部附属小学校「個の確立を目指す授業の創造」 (平成25年～28年)